第 1 回　ゆとりの教育

現在わが国では少子化が急速に進行しているが、学校教育においては児童生徒の学力低下が重要問題のひとつになっている。現在の学校教育では教師や児童生徒の双方にそれぞれの問題を抱えているが、基本的には学習指導要綱が大きく影響を及ぼしている。

わが国では 1992 年以降 18 歳人口が減少に転じ、受験情勢は大学の大衆化からさらに進んでいまや大学全入化の時代へと移行してきており、誰もが容易に大学へ進学できる情況であるといっても過言ではなく、このことも学力低下を助長している一因と思われる。しかしながら、学力低下の大きな原因のひとつとしては現在の学習指導要領における「ゆとりの教育」があげられるであろう。

文部省（当時）は、1977 年から「受験戦争」や「落ちこぼれ」や「偏差値重視」などの社会風潮をもたらすような学校教育の欠点を是正するために「ゆとり」重視へと学習指導内容を方向転換したが、残念ながらこれは学習すべきことの内容と時間の一律削減にすぎず、その後総合的学習が加えられた内容になり、週休二日制の導入と相乗して、学力低下につながったと考えられる。

児童生徒の教育到達を国際的な尺度で測定した IEA（国際教育到達度評価学会）調査によると、2003 年では中 2 の数学が 1999 年と同じ 5 位、理科は 4 位から 6 位となり、小 4 の算数は 1995 年と同じ 3 位、理科は 2 位から 3 位になった。また、15 歳の生徒を対象として知識活用力と課題の解決力を国際的に測定した OECD（経済協力開発機構）による学習到達度調査で日本は、2000 年と 2003 年調査では、「読解力」が 8 位から 14 位に、「数学的リテラシー」が1位から6位へと下がり、「科学的リテラシー」は2位のまま変わらなかったが、2003 年に初めて調査した「問題解決力」は 4 位という結果であった。このように近年のこどもたちの学力は国際的にみても低下傾向にあるといわざるをえない。

藤原正彦氏（お茶の水女子大学理学部数学科教授）は、「知識・論理・情緒」と題した最近の講演で、「独創性や創造性は、知識がなければ生まれないことから、子どものときに徹底的にたたき込むことが必要である」と述べられた。あくまでもご講師の独断と偏見であると断ってから、現在のわが国の学校教育の間違いを指摘された氏の話は含蓄に富んでおり、

筆者にとっても共鳴する部分が多かった。講師で氏は数学者としての考察をもとに、創造的人間になるための必要とされる条件を五つ示された。そのひとつは、先ず知識量が豊富である必要があり、そのために努力家でなければならない。つぎに、極度の精神集中ができる人物であることで、そのためには野心と自信をもちながら楽観的でなければならない。その三つ目は、長期間精神集中できるようになること。つまりへこたれないことである。四番目は、優れた感受性・情緒を備えることであるとして、これは特に重要なこととして時間を割かれた。最後に論理的であることが必要条件のひとつであるといわれた。これらの条件の中でも感受性や情緒は、物事を論理的に考える必要がある科学するものにとって極めて重要であり、しかもこどものうちから培っておかなければならない。万葉集、古今和歌集、そして俳諧などにみる日本人の感受性や情緒は世界に類を見ない優れた資質であり、自然の中の生命のはかなさ、わび、さびなどを感じ、学べるような教育は是非とも必要であると述べられた。

藤原正彦氏の講演は筆者自身の子どもの家庭教育をも思い出させるものでもあった。

こどもの「ゆとりの教育」は、先ずはじめは、読み・書き・そろばんといわれるような基本的なことを徹底的に教育してからなされなければならないし、その意味では「ゆとりの教育」はやはり間違っているといわざるをえない。最近新たな学習指導要項が出される予定であるということをきくが、是非将来の科学立国を支えるような人物を育てられるような、しっかりしたものであってほしいと願う。